

国家間を移動することによる教育のコンフリクト ブラジルへ再移動する日系ブラジル人の子どもたちの事例から

山本 晃輔 (人間科学研究科 教育文化学)

はじめに

国家間移動とは子どもたちにとって地理的な移動というだけでなく、否応のない生活環境の全面的な転換である。この転換によって生じるコンフリクトを教育問題の点からみたとき、国家間移動は、子どもたちのライフチャンスに否定的なインパクトを招き、それが将来展望や社会生活の困難さに直結してしまう。そこで本研究では、国家間移動することによって起こる教育のコンフリクトを、日系ブラジル人の子どもたちを事例に調査研究し、その実態を明らかにすることが目的である。

調査の概要

1980年以降、日系ブラジル人による日本への「デカセギ」は急増、現在30万人以上の日系人が日本に定住している。当初、日系ブラジル人の多くは一時的な就労を目的としていたが、時代を経ることによって永住希望者も徐々に増加、これに応答するかたちで日系ブラジル人に関する研究も、就労や入国管理政策といった関心から、教育、医療、多文化共生など研究領域は拡大し、近年ではより質的な議論がおこなわれるようになった。

こうしたなか2008年末に起きた世界的な経済不況の影響で、製造業を中心に非正規労働者として就労していた日系ブラジル人の雇用状況はかつてないほどに悪化、日本での就労や定住を断念し急遽帰国する人々が急増した。これは誰も予想できなかった経済不況であったため、帰国選択者の多くは十分な準備ができないままの帰国となった。子どもたちにおいて問題はより深刻であり、自分自身の選択外の要因で国家間移動という急激な環境変化に対応を迫られることになる。

申請者が本調査に先立ち2008年6月～2009年3月にブラジルにおいて実施した、子どもたちの再適応に関する調査では、両親の失業のため急遽帰国し事前準備が充分ではなかったため、ブラジルになじむことができず、ポジティブな将来展望を描けぬまま苦悩し続ける子どもたちが一定数みられた。なかでも子どもたちの困難はブラジルへの教育適応において顕在化しており、言語習得の問題はもちろんのこと学校文化や教育制度の違いに対応を迫られている。前回調査を念頭に、今回は日系ブラジル人の帰国が本格化したいま、ブラジルにおける日系人の教育コンフリクトをミクロレベルから把握することを目的とした。

調査地概要

調査地 ブラジル連邦共和国 ブラジリア連邦区(教育省) パラナ州ロンドリーナ市 アサイ市 サンパウロ州バストス市 (9月17日出発 10月10日帰国)

→前回調査では「日系団体」を中心に帰国生徒を捜した(インフォーマントの偏り)

→そこで今回は、教育局を通じて公立学校を軸に帰国した子どもたちを探した。(6校)

- (1) 帰国した人びとは決して裕福な生活をしていないはず
- (2) 私立学校等の「情報」を少ないだろうから、公立に行くのでは(教育局での情報収集：パラナ州、サンパウロ州、ロンドリーナ市、ツッパン市教育局)
- (3) 日本人移民の歴史を背景に日系人が多いとされる街で聞き取りをおこなう
公立学校に通う生徒を中心に31人名のインフォーマントにインタビューをした。

州・市レベルでの帰国してきた子どもたちへの対応

- ・ 日系人の問題は把握しているが、どのように対処していいかわからない
- ・ 「実数の概要は把握しているが、現状はわからない。現場の先生に聞いてくれ」
- ・ 子どもたち：「こっちの先生はなににもしてくれへんよ。気にもかけないし」
- ・ 「問題」形成されていない。ブラジルの公教育では「日系人」よりも優先度の高い課題を抱えている。→一方で日本と同じく、子どもたちの現状を強く憂慮する教育局もあった。自治体レベルでの対応という意味では、日本の日系人受け入れの初期段階と酷似している。

子どもたちのブラジル教育への適応

- ・ 前回の調査と同じく、日本でブラジル人学校に通っていた生徒がブラジルでも適応しやすい。(ブラジルの学校のほうがやさしいと語る生徒も多い。)
- ・ 日本の都市部から、ブラジルの農村部に移動した子どもたちの戸惑いと諦め。
- ・ 日本で公立高校に進学できないが、ブラジルなら進学できるというケース。(高校の壁)
- ・ 日本の公立学校に不登校気味だった生徒が、経済危機で帰国し、ブラジルの学校にもまったくなじめないというケース。

家族について

- ・ 帰国後仕事を見つけるのは難しい。なかでも40代、50代で帰国した両親が仕事を見つけるのは非常に困難「本当にしんどい家族は仕事を見つけれない」(地方の農家出身が多い)
- ・ 経済的安定を前提として、家族内における文化・社会関係の蓄積の優劣が、子どもの教育、適応に決定的に影響する様子が確認できた。

往還する人々と「教育」

- ・ 日本における公教育に「適応」することは、ブラジルでの教育での「不適応」を招く結果になる。一方で、日本におけるブラジル人学校など「不適応」とされてきた人々は、ブラジルでの帰国後スムーズに「適応」できる傾向にある。(日本における日系人への対応が無策であった結果、私塾形式のブラジル人学校が発展した。)
- ・ 帰国後の家族を待ち受けるのは、経済発展と学歴社会化したブラジルであり、長期間日本に滞在した両親や青年にとって仕事を見つけることは困難。
- ・ 「日系人」というビザの特異性。デカセギは当人においては就労機会、日本においては労働力不足解消、ブラジルにおいては外貨獲得の機会であった。ある意味で、地理的に遠く、制度的に不透明でありながら、制限のない人々の往還がおこなわれた。しかし、子どもたちにとって一方の国で受けた(蓄積された文化、学力、資格)が、移動後に無価値になる。これを有効化できない教育制度、教育現場において教育のコンフリクトが発生している。